

鹿兒島客中の作（亀井南冥）

誰家絲竹散空明

孤客倚樓夢後情

皎月南溟波不駭

秋高一百二都城

誰が家の糸竹か空明に散ず

通釈 鹿兒島に旅行し十三夜の月を見て、その旅愁を詠じたもの。

孤客樓に倚る夢後の情

語釈 ※糸竹Ⅱ糸は琴、琵琶などの弦楽器、竹は笛などの管楽器をいう。※散空明Ⅱ明るい空に笛の音が響きわたること。※孤客Ⅱたった一人の旅人。※皎月Ⅱ白く輝く月光。※南溟Ⅱ南方の大海。

※波不駭Ⅱ波がおだやかなさま。※都城Ⅱ諸侯の師弟や卿大夫の領地にある城の意。

皎月南溟波駭かず

通釈 どこの家で奏でているのか、琴や笛の音が月光に照らされて明

るい夜空に広がっていく。いま、夢からさめ、孤独の旅人である自分が、旅館の欄干にもたれて、この調べを聞いていると、旅愁をかきたてられる。見わたせば、月は皎々と照りわたって、南方の大海は波もなく穏やかである。この百二の都城を持つ鹿兒島に、秋空は高く澄んでいる。

秋は高し 一百二の都城